

公開講座2020報告

2006年に「公開輪読会」として始まった本講座は、現代との接点を探りながら、センター研究員の学びを公開し、聴講者の方々と共有する場として開設している。

昨今の新型コロナウイルス感染症の状況に鑑みると、従来のように一堂に会して対話の場を設けることが困難となった。そのため、今年をはじめのオンライン上での開催となった。

今年度は講座全体の共通テーマを掲げていない。とはいえ、各々の関心は異なれども、仏教における「苦」という一点については意識するようにこころがけた。釈尊は老病死を苦と見定め、その原因を問い、仏陀と成った。この釈尊の問いを引き受けた人々によって、仏教は伝統されてきたと言えよう。この伝統のなかで、仏説や真宗は何を解き明かしてきたのか。あるいは、どのように時代に応答してきたのだろうか。

釈尊の教説、または先達たちの歩みについて学びながら、この講座が同時に私たち自身の苦を課題とする機縁となることを目指した。

全9回の公開講座には、首都圏に限らず、全国からの参集があり、各回の質疑応答は活発な議論の場となった。



救われがたき者とは

—『大乘涅槃経』を読む—

親鸞仏教センター研究員 藤村 潔

今回、公開講座では『大乘涅槃経』（以下、『涅槃経』）のテキストを取り扱った。大正蔵の頁数で換算すると250頁程の大部な経典である。『涅槃経』は主に六卷本、四十卷本（北本）、三十六卷（南本）が現存するが、今回は中国・日本で広く流伝した南本を定本とした。

本経の成立は中期大乘経典に相当し、「大般涅槃」「如来常住」「常楽我浄」「仏性」「一闍提」といった主要概念が出てくる。こうした教理的背景を踏まえた上で、本講座では「救われがたき者とは」という主題を掲げ、『涅槃経』「梵行品」で説かれる「阿闍世説話」について注目した。

『涅槃経』で阿闍世は父頻婆沙羅を亡き者とし、国王となりマカダ国の実権を握った。ところがほどなくして病床に臥してしまう。大臣による六師外道の論説が紹介され、五逆罪を犯した阿闍世の過去の罪業を強く否定する。だが、それらの言葉のいずれもが道徳否定論や運命論であり、最後まで阿闍世は身心の安らぎを得られなかった。そのような中で「無慙愧は名づけて、人とせず、名づけて畜生とす」と発した耆婆の言及が、阿闍世を呼び覚ます救いの第一声であったと言える。これらの所説を、親鸞が『教行信証』「信巻」のなかで長文にわたり引用していることは極めて興味深いところである。

フロアとの議論の中で最も関心を集めた点が、救われぬ代名詞である「一闍提」と「阿闍世」との関係である。本経は阿闍世説話が一闍提の救済を象徴するものとして説き明かしているように見えるが、『涅槃経』の文意と、親鸞が「信巻」で理解する経説とは、はたして同意であるのか疑問が残った。換言すれば、親鸞自身が一闍提であるのか否かといった切実な問いに他ならない。

ブツダ釈尊の一日一夜の最後説法である『涅槃経』において、最も救われがたき身である阿闍世が説き示されることは、現代を生きる我々一人ひとりに大きな示唆を与える。つまり『涅槃経』とは、最後の最後まで如来の悲願が止まない至極の仏説であったと言えよう。

親鸞を再読するという課題

— 金子大榮による戦後の思索 —

親鸞仏教センター研究員 東 真行

金子大榮（1881 - 1976）は、真宗大谷派の近代教学を代表する学僧のひとりである。ほぼ一世紀に近い生涯のなかで『教行信証』や『歎異抄』をくりかえし講義した。今回は、そのなかでも特に第二次世界大戦後の思索に注目する。

戦後の金子は、場合によってはかつての自身の了解を批判しながら、親鸞の言葉を読み解いていく。すでに『歎異抄講話』（1934～1935年）や『教行信証講読』（1938～1941年）などの書を発表していたが、あらためて聖教を聞思するなかで、『歎異抄聞思録』（1948～1950年）や『教行信証の研究』（1956年）といった著作を金子は新たに公開していくのである。

金子の生涯をつらぬく問いとは、現今の我が身と仏教の説く真実とが、いかに関係を切り結ぶかにある。その関心から、自身の苦悩に応答する教えとして無量寿経が見出されていく。自然の大地より誕生した人間なればこそ、久遠の郷里たる浄土を生きながらに——そしてほのかに感覚し得るという金子の浄土仏教理解は、初期の『仏教概論』（1919年）などから晩年まで一貫する。

經典の文言が有する響きを身に感覚し、教えられるところを金子は時代社会のなかでその都度に表現した。たとえば『歎異抄』第五章における「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」（『真宗聖典』、628頁）といった言葉を再読するなかで、戦時下の日本主義的視座を自他共に批判しつつ、次のように述べている。

世界の人々が皆われらの同胞であつたのである。つまり国民としての感情をひとまづ否定しなければ、今日の人々が言はうとしてをるところの本当の世界の平和といふやうなもの業縁的原理は出て来ないのでないかと思ひます。（『歎異抄聞思録（上）』、コマ文庫、243頁）

自国優位の考えを破壊しなければ『歎異抄』は読めないとも金子は語っており、ここにこそ「懺悔」を認め得るだろう。みずからの見解より聖教に重きを置き、その意を聞思する、戦後の金子ならではの親鸞の読みなおしである。

大正期における「現代」と真宗

— 真宗大谷派仏教学会の取り組み —

親鸞仏教センター研究員 谷釜 智洋

本講座で取り上げた仏教学会とは、大正2年（1913）に真宗大谷派（以下、大谷派）が「宗門教育の普及を図る」ため設立した組織である。仏教学会は一般寺院の僧侶や門徒等を対象とした講義録並びに叢書を発行し、真宗学・仏教学をはじめ社会問題等も取り上げ、啓発活動を展開した。仏教学会の刊行物は、大正期の大谷派がいかに時代の潮流に応じようとしていたのかを知る上で重要な資料であるが、従来この組織の活動についてはほとんど注目されてこなかった。本講座では、この仏教学会が展開した取り組みや啓発活動を通じて大正期の大谷派がいかに「現代」と向き合ってきたのかについて取り上げた。

仏教学会の活動の始まりは、寺院の僧侶、門徒、及び地方で教育に従事する者や公吏に対して、「仏教通信講義を発行して之を会員に配布」といった、通信教育という方法で真宗・仏教を中心とした教育をおこなうことであった。

大谷派機関紙の記事によれば、『仏教通信講義』の刊行はあらゆる方面から好評であり、「貧弱なる学校を新たに創設するより寧ろ教界に貢献すること甚大也」と評された。また、この他の記事にも、この仏教学会の取り組みが「宗門教育の欠陥を補充」することができるだろうと述べられている。これらの記事だけでは判断し難いが、仏教学会の設立は当時の大谷派が抱えていた既存の宗門教育機関に対する痛切な自己批判から起こり、学事の諸問題に答えようとしたものとも考えられる。なお、この仏教学会の取り組みは、大谷派の教育機関である真宗専門学校（大正10年〔1921〕開校）、および京都大谷専修学院（大正13年〔1924〕開校）といった僧侶養成の専門学校が次々と開設される以前のものであったことを考えれば、大正期の「現代」にあった地方の僧侶並びに門徒等に対する教育の一端を担うものとして大いに貢献したものであった。

本講座の質疑から、仏教学会の取り扱った講義科目が近代「学校令」といかに関係していたか、なぜ地方の市町村の教育者並びに公吏にまで会員になることを勧めたのか、などと仏教学会の全貌を明らかにするための課題も見えてきた。